令和３年度

印旛地区教育研究集会

生活科分科会　提案資料

研究主題

自ら学び，思いや願いを表現できる児童の育成
～学びをつなげる生活科の在り方～

第２部会　成田市立加良部小学校
飯嶋　真澄
鈴木　杏奈

1　研究主題

自ら学び，思いや願いを表現できる児童の育成
～学びをつなげる生活科の在り方～

2　設定理由

1）今日的な教育課題から

今日インターネットの普及とともに世界中でグローバル化が急速化し，世界がより身近に感じられるようになり，インターネット上での情報共有や自分から他者へ情報発信することが容易になった。

一方で，情報化社会の発展に伴い，子どもたちを取り巻く環境は著しく変化を遂げてきた。そのため，子どもたちは様々な変化に自ら向き合い，他者と協働して問題を解決したり，正しい情報を見極めたりしながら目的を再構築することが求められている。

２０１９年の全国学力・学習状況調査の国語科（読む，話す，聞く）では，文章全体を概観して読み，相手の意図をとらえて聞き，自分が理解したことを質問できることが分かった。一方，書くことにおいては，記述の工夫や，自分の考えの理由を明確にしてまとめて書くことに課題が見られた。算数科では，数量や図形について理解し，正確に処理することができることが結果に表れた。半面，計算が成り立つ性質を見出し表現することや道筋を立てて考えて処理し，得られた結果から判断することにおいて正答率が低いことが分かった。

OECD の PISA 調査（２０１９）によると，数学的リテラシー及び科学的リテラシーにおいて７９か国中日本はトップレベルに位置しているものの，読解力リテラシーでは１５位となっている。文章を理解する力は優れているものの，情報を探し出す力や根拠を示して説明する力に課題があるという結果になった。

こうした結果を踏まえ，生活科においても自分の考えをもち，相手に表現したり課題を解決したりする力を育んでいく必要があると考えた。

今後，ますます社会が多様化し急速に社会が変化していく中で，児童が自ら解決困難な課題に立ち向かい，解決していくことが求められてくる。そのため，知識の獲得だけにとどまらず，思考し，表現することを通して生きる力を身に付ける児童の育成ができると考え，本主題を設定した。

2）学習指導要領から

生活科の教科目標は，

「具体的な活動や体験を通して，身近な生活に関わる見方・考え方を生かし，自立し生活を豊かにし，自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成すること」である。さらに，生活科の目標の構成は，以下のようになっている。

【育成を目指す資質・能力】

（1）　活動や体験の過程において，自分自身，身近な人々，社会及び自然の特徴やよさ，それらの関わり等に気付くとともに，生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。（知識及び技能の基礎）

（2）　身近な人々，社会及び自然を自分との関わりで捉え，自分自身や自分の生活について考え，表現することができるようにする。（思考力，判断力，表現力等の基礎）

（3）　身近な人々，社会及び自然に自ら働きかけ，意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。（学びに向かう力，人間性等）

これらを受けて，今回の研究では，３つの視点から主題を設定した。

①　「知識及び技能の基礎」に関する視点

この視点の１つとして，社会，自然，人との関わりに気付くことがある。関わりに気付くとは，対象に対する一人一人が認識され，児童が主体的に活動し，自らの学びにつなげることである。気付きは，確かな認識とつながるものであり，知識及び技能の基礎として大切なものである。児童の思いや願いを実現する過程において身に付けていくことで実生活や実社会の中で生きることにつながると考えた。

②　「思考力，判断力，表現力等の基礎」に関する視点

この視点での関わりは，身近な人々，社会及び自然を自分との関わりで捉えることにある。それは，対象の特徴や価値を見いだすことである。さらにここで重要なことは，「自分自身や自分の生活について考え，表現すること」である。考えることとは，児童が自分自身や自分の生活について，見付ける，比べる，たとえるなどの学習活動を分析に考えることである。さらに表現することは，気付いたことや考えたことなどについて，言葉，絵，動作などの多様な方法によって，他者と伝え合い振り返ることである。学習場面でそれらを習得し，活用することで実生活に結び付けることができるように考えた。

③　「学びに向かう力，人間性等」に関する視点

思いや願いの実現に向けて，身近な人々，社会及び自然に自ら働きかけ，意欲や自信をもって学んだり，生活を豊かにしたりしようとすることを繰り返し，それが安定的に行われるような態度を養うことを目指す。

生活科では，思いや願いを実現する過程において，児童が学びに対して主体的に活動することを通して，自分自身の成長に気付くことや，活動の楽しさや満足感，成就感など手応えを感じることが，一人一人の意欲や自信となっていく。この意欲や自信が，次の活動や学び，これからの生活に生かしたり新たなことに挑戦したりしようとする姿を育成するために主題の「自ら学ぶ児童」にか

かわっている。

さらに，平成２９年改訂の学習指導要領では，幼児期の教育と小学校教育の連携を図ることを充実させ，円滑に移行することを重視する観点から，小学校入学当初において合科的関連的な指導などの工夫，つまりスタートカリキュラムを行うことが明示された。このことから，幼児期の教育を終え，新たな環境で児童が安心して学校生活を送るために生活科が担う役割は大きいと考えられる。学年が上がるにつれて学習内容の難易度を増していくが，学習に対する見方や考え方，学び方の土台があってこそ中学年の学習とつながるものである。小学校低学年の学びが中学年への接続していくこと，学びの連続性について重要視されたことで，社会科や理科，総合的な学習時間が始まる中学年の各教科への接続を明確にすることが新たに提示された。

これらを受けて，新学習指導要領における中学年以降の学習の接続に重点をおいて研究をすることとし，主題に含めていくこととした。

3）学校教育目標およびめざす児童像から

＜学校教育目標＞

（夢をもち，未来を拓く）

確かな学力を身に付け　心豊かで　健康な子どもを育てる

＜めざす児童像＞

自ら学び考える子	思いやりのある心豊かな子	健康でたくましい子
自ら学ぶことに興味や関心をもち，見通しをもって粘り強く学び続ける子	優しさや思いやりの心をもち，自他の良さを認め合い，磨き合う子	心身のバランスを保ち，健やかにたくましく生きる子
・**基礎的基本的知識・技能**を確実に身に付ける子 ・他者との**意見交換や議論を通じて自分の考えを広げられる**子 ・**学んだことを生かし**ながら，**課題を解決したり意味や価値を創造したりできる**子	・自らの行動を振り返り，**他者と気持ちよく生活**のできる子 ・**きまりやマナーを意識**して，**自律的に共同社会を形成**できる子 ・**自然や文化を尊重**し，郷土の良さを感じられる子	・進んで運動に親しみ，**健康な体づくり**のできる子 ・**自他の生命を大切**にし，安全に心がけて行動できる子 ・困難に負けず，**最後まで諦めずにやり抜く**子 ・勤労を尊び**協働する喜び**を実感できる子

＜目指す教師像＞

① 愛情をもって子どもを大切にする教師
② わかる授業　学ぶ喜びを育む授業のできる教師
③ 特性を生かしながら　協働・協調できる教師
④ 規範意識を持ち　教師のプロとして品格のある教師

◎「自ら学び考える子」を育成する視点

児童が意欲的に学習に取り組み，次の学習へのめあてをもちながら学んでいくためには，教師が目の前にいる児童の実態を把握し，創意工夫ある授業を展開し，活動に応じた指導方法で進めながら授業を創造することが必要である。また，「自ら学ぶ」ためには受け身ではなく，自ら課題や疑問を見付けたり，自然や社会との関わりの中から新たな疑問を発見したりすることが必要である。そして，見付けた課題をどのような方法で解決するかが「自ら学び考える子」への具現化になると考えた。

◎「思いやりのある心豊かな子」を育成する視点

学校は，学習の基礎的・基本的な知識及び技能を習得するだけではなく，相手の良さを認め，他者と協力しながら活動する喜びを感じられるように，人との関わりを工夫することで心豊かな子どもを育成できると考えた。さらに，課題を解決する中で自分の考えをもち相手の考えと比べ，伝え合うことで新たな発見や気付きが深まり，関連付けられる。そのために，学校生活を通して人との関わりや関わり方を学び，豊かな心を育むことで，「思いやりのある心豊かな子」に結びつくと考えた。

◎「健康でたくましい子」を育成する視点

生活科の学習を進める上で，児童は，数多くの問題や課題に出会う。問題や課題に対して，友達と協働しよりよい解決方法を考え，最後まで諦めず何事にも挑戦することで健康でたくましい子を育成できると考えた。その中で，体や心を健康に保ち，生活し学習に向かう体力をつけておくことが必要である。

(4) 地域や児童の実態から

本校は，成田市のニュータウンに位置し，児童数507名の学校である。学区が広く，緑道を通り徒歩5分程度で登校できる児童がいる一方で，40分ほどかけて登校してくる児童もいる。学区周辺には，マンションや戸建てが建ち並び，図書館や公民館，消防署などがある。また，大型の商業施設，スーパーマーケット，ガソリンスタンド，飲食店などが多く便利な地域である。学区には，公園も点在し放課後の子どもたちの遊び場となり，恵まれた環境にある。

児童は，明るく元気でのびのびとした子が多い。放課後は，公園などで友達と一緒に遊ぶ児童もいるが，学習塾などの習い事をして過ごす児童も多い。

学習に対して意欲的な態度で，与えられた課題に対して真剣に取り組む児童が多い。一方で，課題を与えられないと自ら課題を見つけて取り組むことが難しい児童もいる。さらに，相手の気持ちを考えることができず

に行動したり，自分の思いや気持ちを相手に伝えたりすることができずトラブルに発展することも多く，コミュニケーションを取ることを苦手とする児童も多い。

そのため，学習環境を整えることで児童が進んで学びに向かい，活動や新たな体験から相手や友達との交流を通して表現する力を高めるようにする。表現する力を身に付けさせることで，中学年以降の学習の土台となり，自ら学んだことを生かしながら次への学習や自分自身の成長を高めることを目指すことで主題に迫ることができると考えた。

↓

生活科を通して育てたい子どもの姿

① 次への**めあてや意欲を高める**（調べたい，やってみたい，伝えたい）

② 活動への主体性（「○○するために，○○が必要かな。」
「○○するために，○○を作りたい。」）

③ **相手へ表現することで思いや願いが確かなもの**となる。

④ **伝え合いを通して**気付きの質を高める。

⑤ 自分の成長を感じ，できるようになったという**達成感や充実感を味わう**。

研究主題を実現するために，本研究では，以下のようにとらえた。

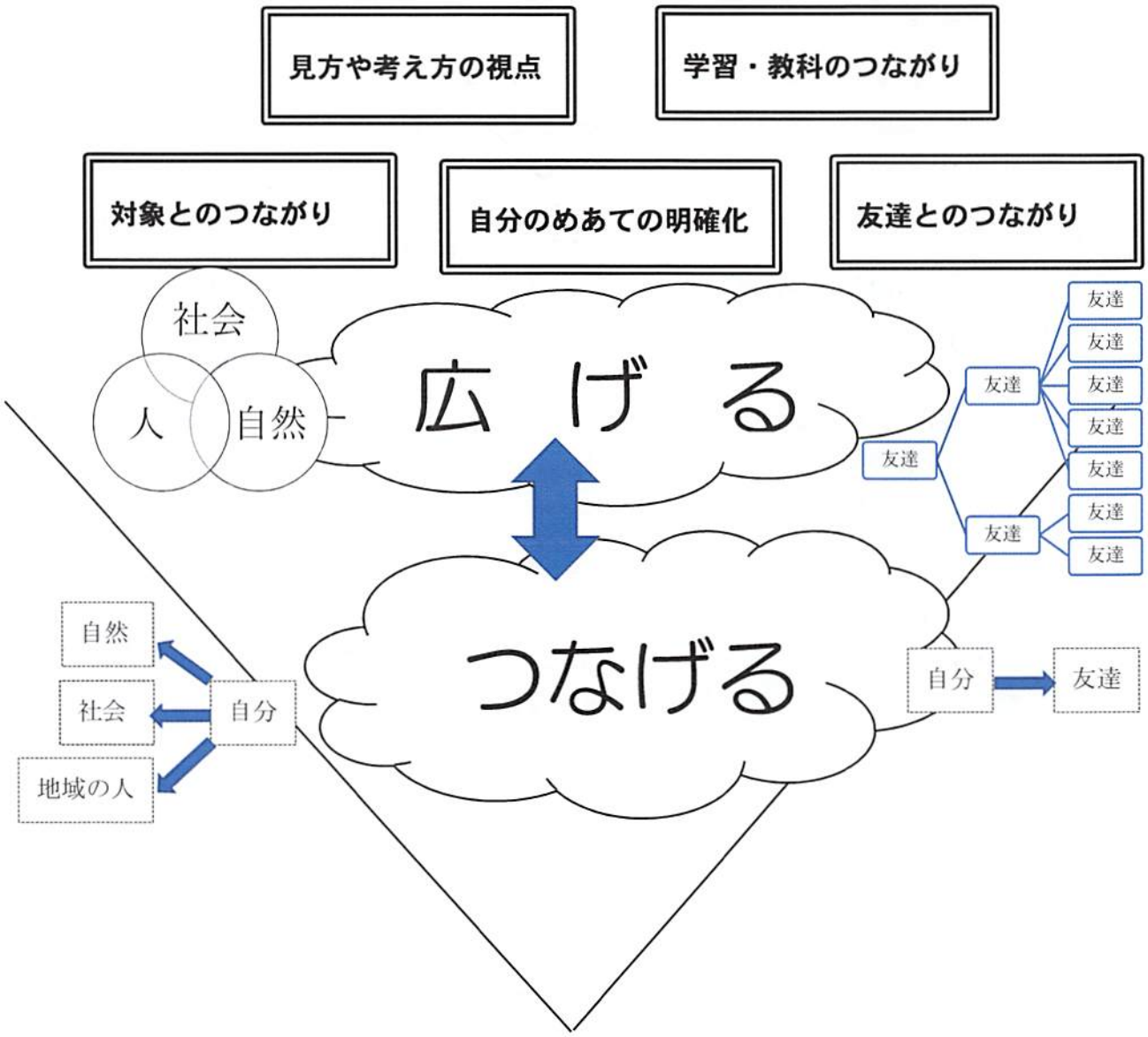
「自ら学ぶ」・・・・・・対象と関わる中で自分から課題や疑問を見付け，めあてをもって取り組むこと。学びに向かう態度や姿勢

「思いや願い」・・・・対象と関わる中で生まれる発見や考え，気付き
「○○をするために，○○を使って調べたい」
「次は，○○したいな」「○○さんに伝えたいな」
「○○したら，うまくいった」「○○するために，○○が必要だな」

「表現」・・・・・・・・自分の思いや考え気付きなどを言葉だけでなく，絵や文，動作化などで相手に示すことや伝えること

「学びをつなげる」・・・次の学習への意欲やめあてをもつこと
対象との関わりをつなげること，深めること
身近な生活に関わる見方や考え方の視点を広げること
次学年や中学年の学習や教科につなげ，活用すること

＜学びのつながり＞


見方や考え方の視点
学習・教科のつながり
対象とのつながり
自分のめあての明確化
友達とのつながり
社会
人
自然
広げる
つなげる
友達
友達
友達
友達
友達
友達
友達
友達
友達
自然
社会
地域の人
自分
自分
友達

4　研究仮説と手立て

仮説１

対象との関わらせ方を工夫すれば，学習や活動の充実感を味わい，自ら学びに向かう児童が育つだろう。

対象とは，

学校	地域・人材	家庭	人以外のもの
【人】友達	【人】　地域の人々	【人】保護者	自然（草花，虫）
同学年	店で働く人々	祖父母	遊具
他学年	昔遊びの先生	兄弟	標識，信号
教職員	サツマイモの先生		写真
【場所】校庭	【場所】公共施設		地図
教室	公園		時間の確保　　など

≪具体的な手立て≫

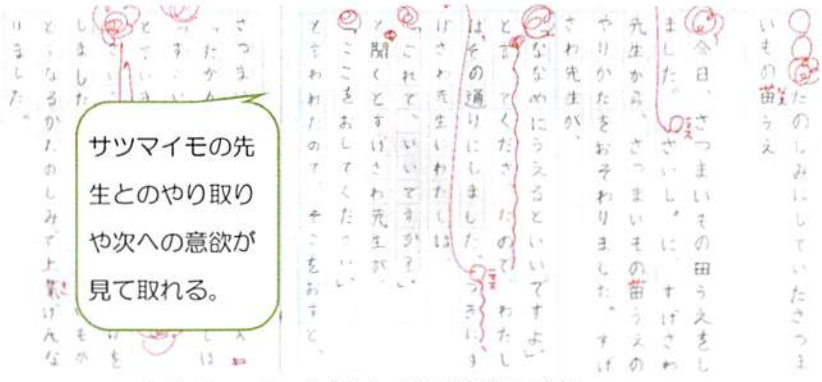
① 対象との出会わせ方　児童が活動を通して充実感をもち，次の学びへ向かわせるためには出会わせ方が必要だと考えた。

（１）導入の工夫（写真，実物や見本などの提示，並行読書の掲示，地域人材の活用）など
→興味をもたせる資料の提示や，教室環境を工夫し，児童と何（人または物）を出会わせるか。いつ出会わせるか。対象との出会わせる方については，今回は主に対象を人的対象と物的対象の２つに分けた。

【第２学年】サツマイモの先生との出会い≪**人的対象**≫

「野菜を育ててみたい」「野菜を栽培して収穫したい」という児童の願いと初めて野菜を栽培するには，どうしたらいいかわからないという不安な思い。その中で，栽培の名人に聞きたいという子どもたちからの願いを受けて実現した。

成田市でサツマイモを作っている農家の方に来ていただいて，苗の植え方や，サツマイモの成長や収穫時期などについて，指導してもらった。活動後，栽培への意欲の高まりや今後野菜を育てるための興味・関心が向上した。もっとこうしたい，という思いや願いを高めることができ，次の学び（夏野菜の栽培）につなげることができた。



↑サツマイモを植えての学習の感想

↑サツマイモの先生との出会い

作年度は，２年生のサツマイモの苗植え（生活科）や３年生の「農家の仕事　成田市のサツマイモ農家」（社会科）を通して，サツマイモ農家の方に指導していただくことができた。

サツマイモの先生　菅澤さん

対象（人的）と繰り返し関わることを通して，次学年へ学習を積み上げることができる。２学年では，自分が苗を植えて収穫し，３学年では，相手（農家）の仕事内容や苦労などについて，理解することにつながった。

【第１学年】付箋の使い方との出会い≪**物的対象**≫

スタートカリキュラムの一環として，幼児期の教育課程との関わりでは，使うことがなかったものとの出会うである。付箋の使い方や利点を児童期の第１学年で教えることで，そのものがもつ良さや初めて使うことでの意欲向上，自ら学びに向かうということをねらう。また，用具を使える充実感を伴うことができ，新しいものを使う時も，出会いを大切にする必要がある。

↑黄色は，**安全**に関するもの

↑青色は，**自然**に関するもの

付箋の色を分けることで，安全と自然に関するものについて，着目させた。

○対象との出会いの工夫

対象との出会いには，効果的な時期や，単元においてどの場面で出会わせるかも必要である。その一つとして，教師が用意する対象との出会いのタイミングがある。先に記載した付箋という物的対象は，児童がそれ自体の存在を知らないものもある。また，指導計画の際に，見通しをもって用意する場合が多い。教師がいかに単元の目標を明確にし，指導していくかという力量が問われる。そのため，教員間の協力体制が不可欠であり，毎年，その改善のために協議を行うことも，取り組みを振り返るために効果的である。

【第２学年】地域の店との出会い≪物的対象≫

↑年間指導計画からの町探検≪場の設定≫

年間指導計画で６月に町探検を設定している。進級し，学校や家庭の範囲を超え，自分の生活圏の地域に活動範囲を広げることで，視野を広げ，気付きを高めるためにこの時期の実施が効果的である。

【第１学年】地域の店との出会い≪物的対象≫

↑その場所を想起させるための写真≪導入≫

↑発表の視点を示す指示棒≪発表≫

１学年では，ツールの使い方など，そのものの使うよさを実感させることが大切である。理解を助けるために，分けたり発表したりすることが効果的である。他教科や次学年の学習へとつなげることができる。

（２）活動の動機付け

→どんな活動につなげたいかを引き出す発問をする。児童の思いや願いを生かした活動を創り上げることで，児童が主体となり学びの充実感を得られると考えた。

町探検では，家の人と行ったことがある場所について，どのような仕事をしているのかという疑問をもち，そこから，グループ探検が実現した。また，グループ探検後には，その場所について分かったことを家族や友達，先生に伝えたいという願いが出てきた。教師が予想していた発言だけでなく，予想していなかった児童の発言から急遽用意するものもあり，児童の発想に委ねられている場合もある。児童の気付きや今までの学習の活用などが見とることができ，評価としても使うことができる。

「いつもお母さんと来るスーパーに行ってみたい！」という願いを現実にした。

↑どの場所に見学に行きたいかという願い≪場の設定≫

「一緒に来てくれた家の人や来られなかった家の人にも勉強の成果を見てほしい！！」という思いを現実にした。

↑誰に発表したいかという思い≪場の設定≫

（3）対象と関わる時間の確保

→「活動する」「書く」「考える」「話す」「聞く」などを通して，対象物と繰り返し関わることや，関わった対象について友達と伝え合う。

限られた時間の中で，学習を進めていくためには，対象とどれくらいの時間を使うかは，重要な点である。そのため，子どもたちが習得していること，活動できることを見極め，活動１時間の目的やめあて（習得させるべきこと，活用させるべきこと）を教師がしっかりともち，計画し実践していくことが必要となってくる。

↑学区探検【２時間】　↑自分で考え，カードを書く【２時間】↑見合う【２時間】　↑友達と一緒に考えていく【２時間】

② 対象と関わる学習の進め方

（1）繰り返し関わる活動の工夫（学校探検１→学校探検２，学区探検→公園探検，町探検→グループ探検）

→場所や活動内容を少しずつ変化させながら，取り組ませる。

そのために，仮説２の学びをつなげることに大きくかかわってきており，前の学年や前の単元で学習したことや習得したことを活用していくことにつなげる必要がある。

↑第1学年での学習《通学路と公園探検》

↑第2学年での学習1《通学路》

↑第2学年での学習2《通学路からの町探検》

↑第2学年での学習3《2回目の町探検をした後の発表】

（２）個人・グループ・全体での活動の広がり

→少人数から大人数へ段階的に学習形態を変える。

少人数から，大人数へ段階的に学習形態を変えることで，視野を広げる。それに伴って，新た気付きにいざなったり，気付きの質を高めたりする。気付きは，確かな認識へとつながるものであり，知識及び技能の基礎として大切なものである。

↑個人で活動

↑グループで活動（話し合い）

↑学級全体で共有（発表）

まず，個人で活動する。自分の考えをもち，表現する。

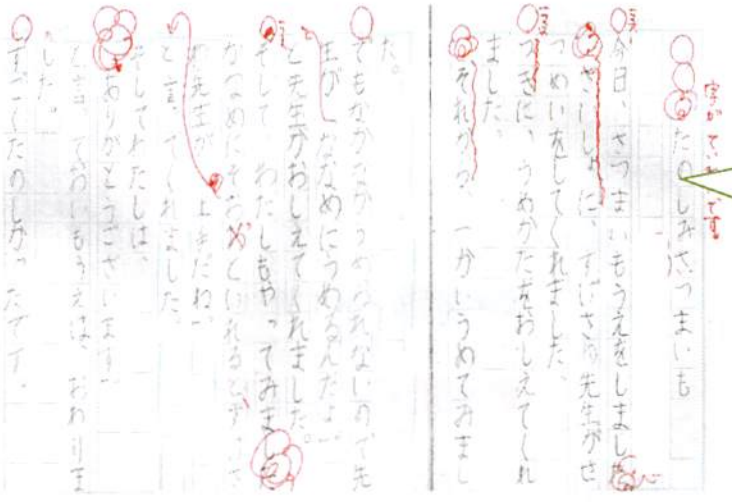
次に，グループで活動する。自分では，気付かなかった新たな気付きへと高める。

最後に，全体へ発表する。気付きの質を高め，確かな認識へと導く。

（３）対象からの励まし，認め合い，助言

→対象と関わることで，新たな発見や気付きの質を高める。

対象と関わることで，自分のよさ，新たな発見，気付きの質を高める一助とする。集団における自分の存在にも気付くことができ，活動における自己関与意識や成功感，成就感などから，仲間意識，帰属意識が育ち，共によりよい生活ができるようになる。さらに，自分のよさや得意としていること，また，興味・関心をもっていることなどに気付くことや自分の心身の成長に気付くことにもつながる。



専門家の的確な助言が子どもたちの気付きにつながる

↑サツマイモの先生からの助言や励まし

仮説２

学びをつなげ，伝え合う場や振り返る場を工夫すれば，気付きの質が高まり，自分の思いや願いを表現できる児童が育つだろう。

≪具体的な手立て≫

① 学びをつなげる→学習のつながりの視点

学年間・上学年，下学年・単元間・教科間など，合科的・関連的な指導，教科等横断的な視点で教育課程の編成，実施上の工夫を行うことが重要である。

第１学年　学区探検（６月）

用意された地図に貼る。
付箋は２色（自然・安全）
主に絵で伝える。
グループで活動。

第２学年　町探検（７月）

自分で地図を描く。
付箋は３色（自然・店・人）
主に言葉と絵で伝える。
１年生の時のことを活用してグループで活動。

第３学年　わたしたちの市（７月）

白地図を利用
色分けは６色（高低差・土地の使われ方・交通・空港・公共施設・伝統的な建物）
ワークシートを使用して言葉と絵で伝える。
１，２年生のことを活用して，初めて個人で作成する。

第１学年では，この時期の児童にとって，絵で表現方法が必要なため，付箋の使い方を理解し，活用した。付箋紙の色を項目ごとに分けることで，見る視点が明確になり，思考を深めることにつながった。

第２学年では，自分の通学路を道カードに表した。友達の通学路との違いに目を向けることができ，表現する力が高まった。付箋紙の項目を増やし，言葉と絵で伝えた。

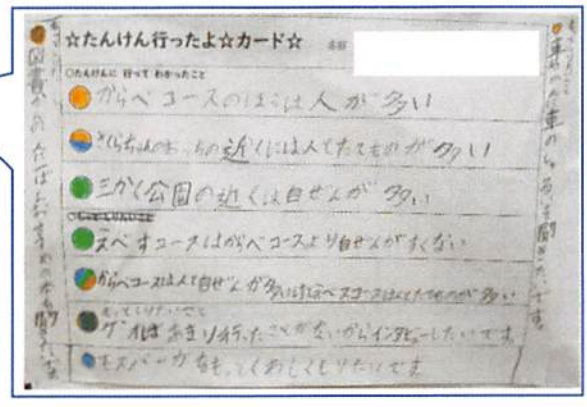
第３学年では，付箋紙からワークシートに変わり，より高度な表現方法になったが，前学年で習得してきたまとめる力を活用し，表現する力が高まった。

❶同学年・単元間のつながり（町探検の学習：単元の系統を見据えた指導）

個人で描いた道カードをグループごとに，一枚の模造紙に貼り合わせた。そこに，気が付いたこと色分けした付箋に記入した。

↑第２学年【６月】

色別表記を活用し，表現する力を身に付けるようにした。



↑第２学年【７月】

実際に探検に行ってみて，分かったことを地図上に表記した。付箋の使い方，書き方は，前の時間のことを活用した。さらに，方面の道順を赤線と青線に分けて表記することで，３年生への学習につなげていく。

付箋を使ったことで，児童一人一人の思考がたくさん溢れ，表現することにつながった。

1枚目は，新しい表現方法を習得した。

・字の大きさを変える。

・分かりやすい絵を入れる。

色を変えると分かりやすいという付箋での学習を活用して，色遣いやレイアウトを考えた。

・部屋の名前→黒

・説明　　→緑

・配置は，上→部屋の名前

　　中→写真

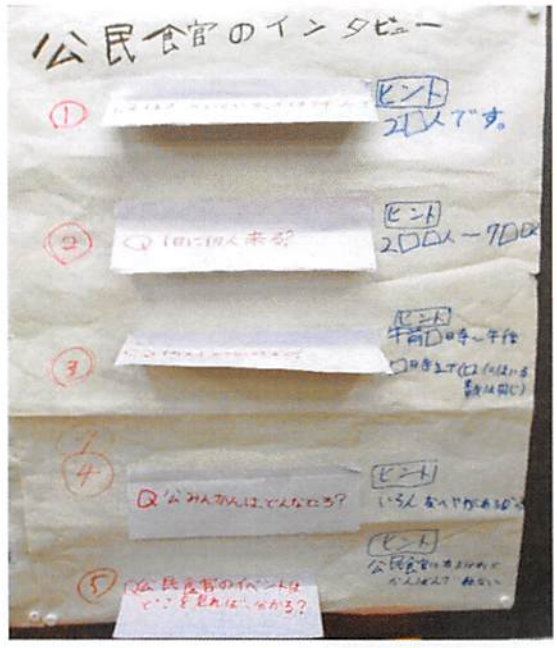
　　下→説明

2枚目は，1枚目を活用して，インタビューで分かったことをクイズ形式にした。

レイアウトは，横に①番号　②問題　③ヒント　の順番。　番号と問題は，赤。ヒントは，青で表記。

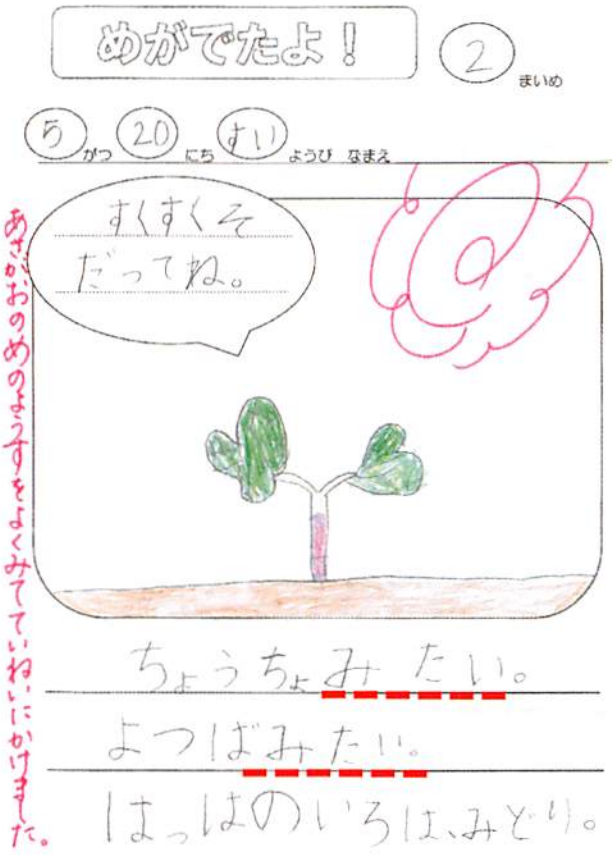
保健室にあった掲示をまねて，問題の裏に応えを書く形式を習得して活用した。

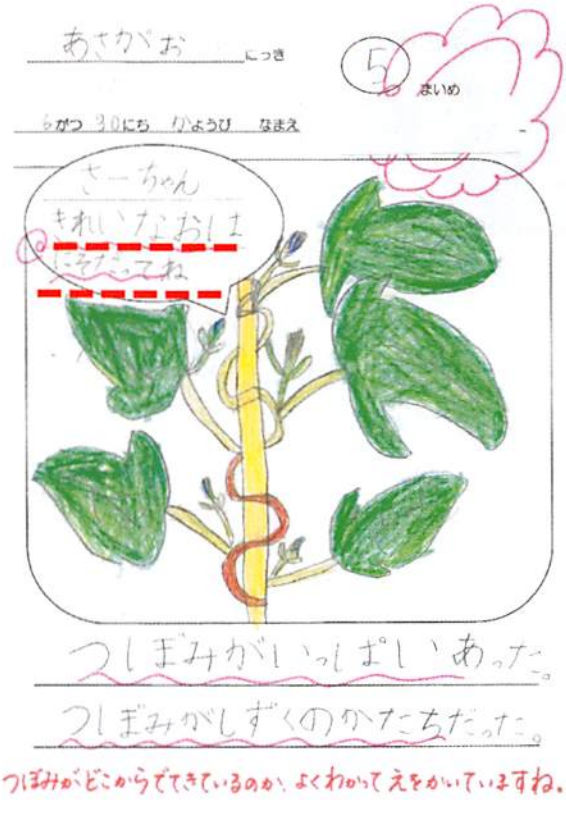
ここで習得したことを今後の学習（他教科も含む）や3年生に活用していく。



❷学年間・教科のつながり（学年間の植物の栽培：単元の系統を見据えた指導）

アサガオの観察（１年）



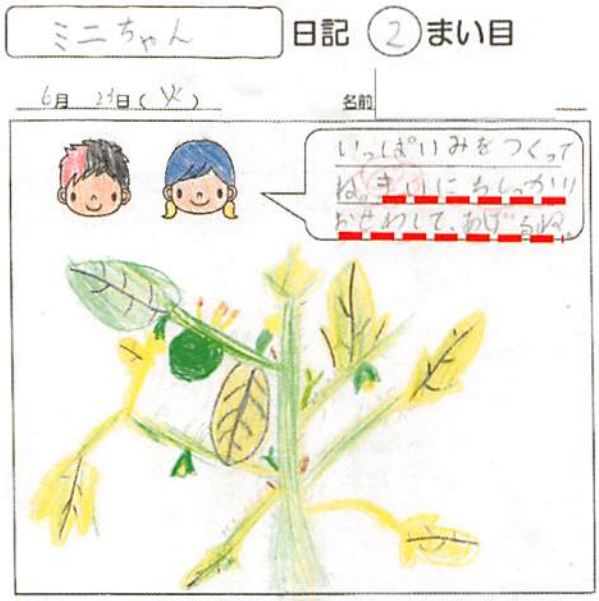


１学年では，アサガオの栽培を行った。一人一人が，アサガオに名前をつけることで，愛着をもち大切に育てたいという意欲につながった。さらに，吹き出しを活用することで，自分の思いや願いを素直に表現することにつながった。

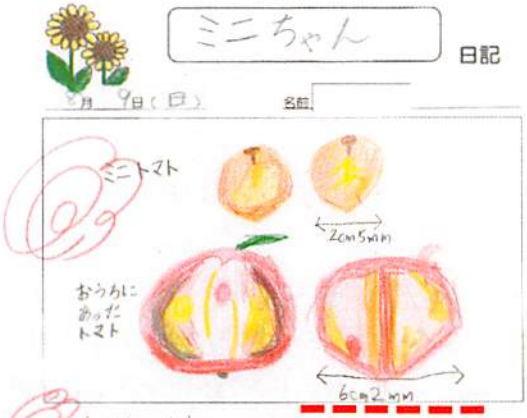
観察時には，見たことを「～みたい」と表現し，形の特徴をとらえた。大きさや長さについては，自分の手や基準となる支柱をもとにして考え，表現する力が高まった。

野菜（トマト）の観察（２年）

○はっぱがざらざらしてた。
大きに白いけがついている。
大きくてもはっぱは小ゆびーこぶん。



○けがまえよりは、へった。
はっぱのせんがふえてる。
すごしおおきなみができている。
ちょっと左にたおれてきてる。



ミニトマトはオレンジ色で下のほうがとがっていた。
家にあったトマトとくらべてみると、ミニトマトは、たねが少なくかたかった。たべてみたら、においはどちらもかわらなかったけど、あじは、ミニトマトのほうがすっぱかった。ぜんぶでみっつ実がなった。

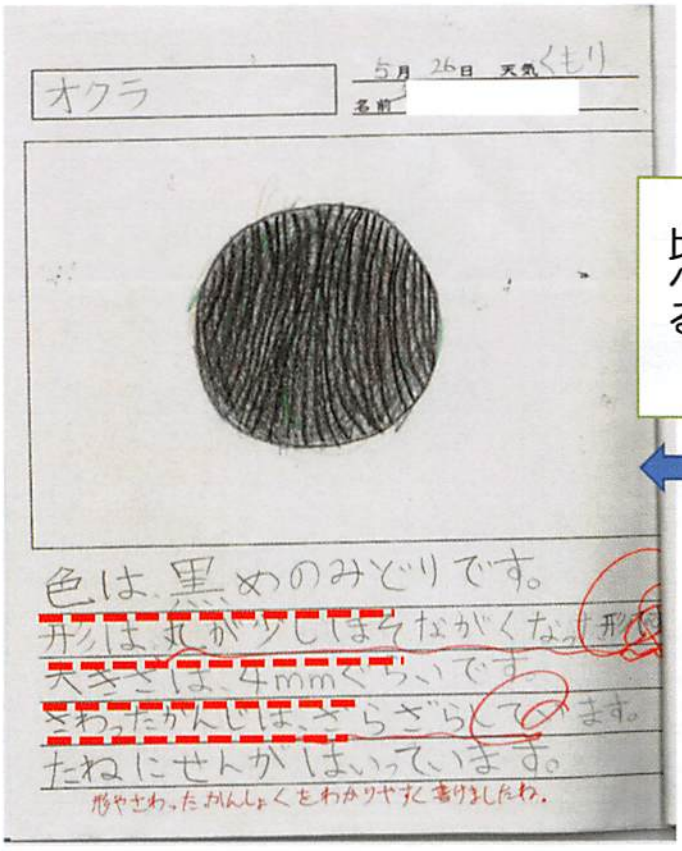
習得したことを活用することのよさや楽しさを実感するとともに新しい気付きにもつながる。

第２学年では，夏野菜の栽培を行った。第１学年同様に，自分の野菜に名前を付けて大切に育てた。

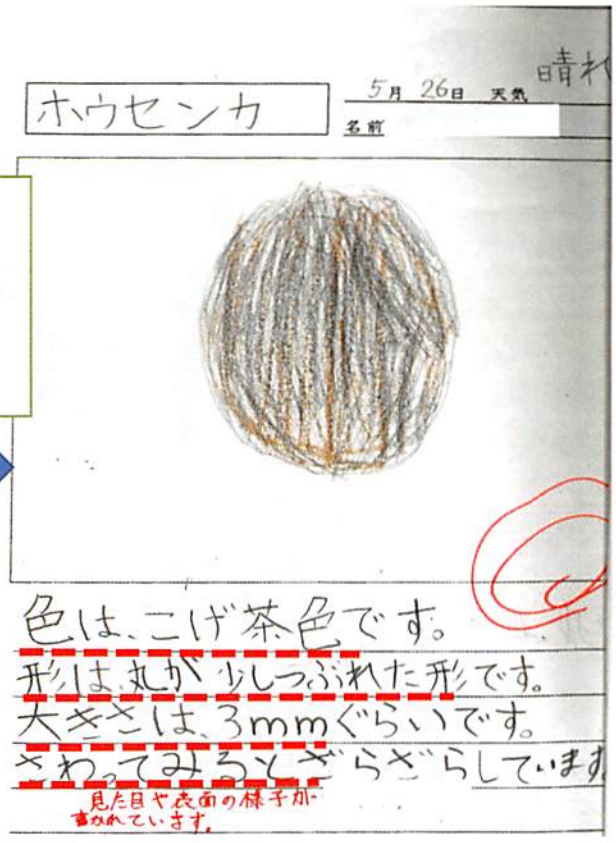
観察時には，手で触った感触を表現したり，茎や葉の様子や特徴をとらえて表現したりすることができた。

算数科「長さ」の学習後の観察では，実の大きさについて，ものさしで長さを測り，学習したことを活用し，表現する力が高まった。

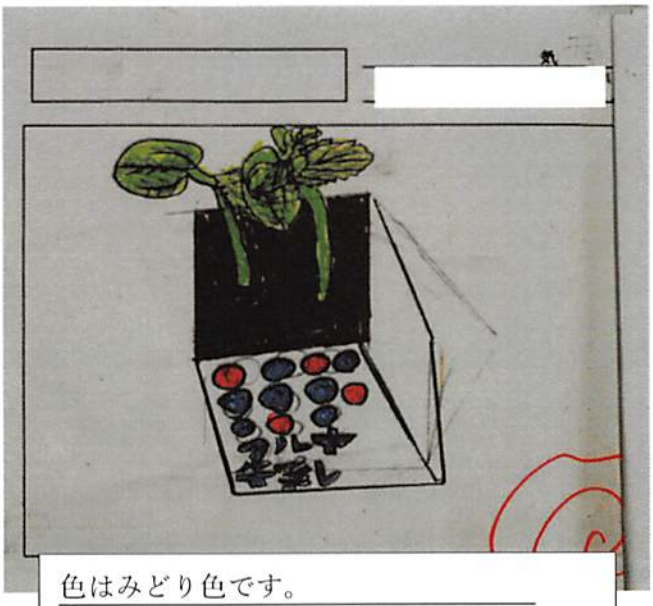
オクラとホウセンカの観察（３年）



比べる

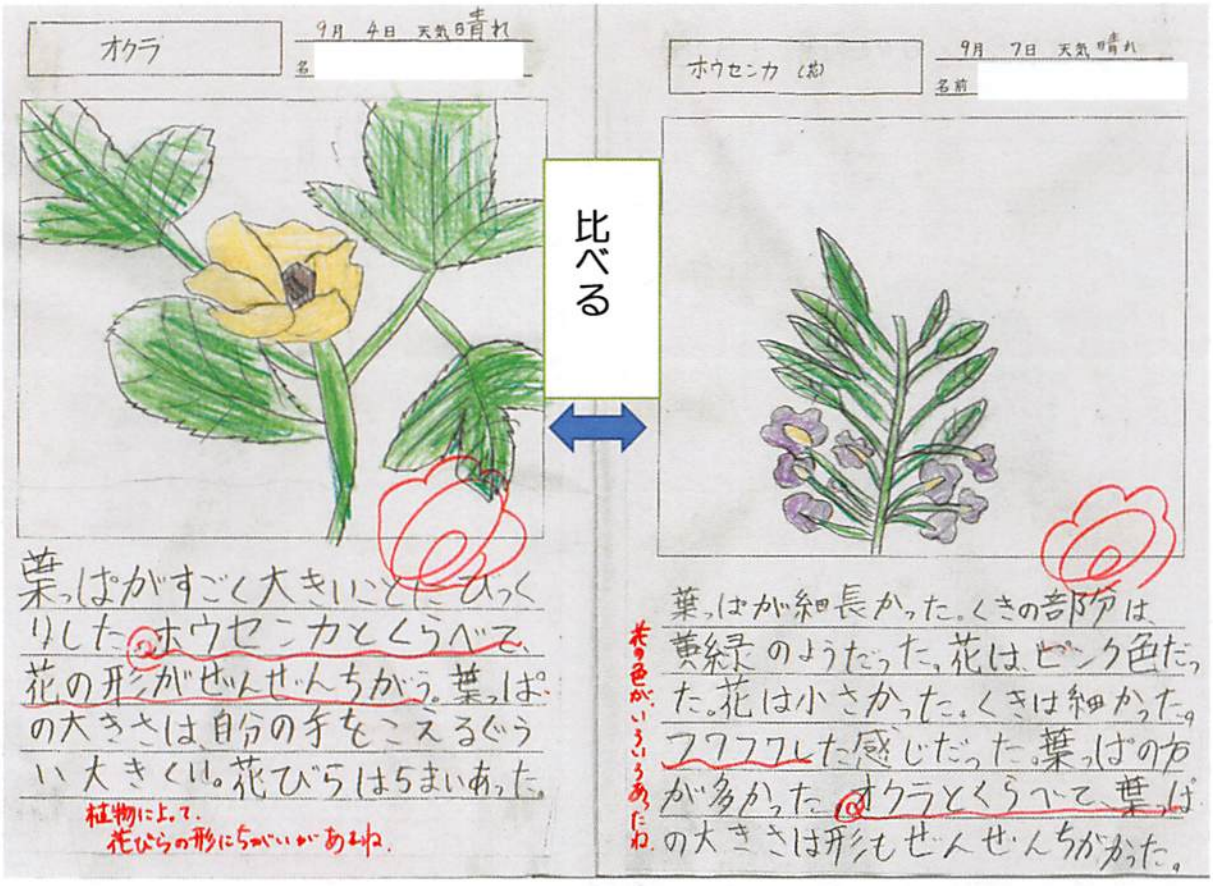


オクラとホウセンカの種について，色，形，大きさ，感触という視点で観察し，表現することができた。さらに，見方や見る視点を明確にすることで，共通点や相違点をはっきりさせることができ，思考が深まる。



色はみどり色です。
形は子葉がハートみたいな形で，あとからでた葉は，ぎざぎざしています。
たての長さは５cmでよこの長さは６cmくらいです。毛がはえていてすこしさわるとふわふわしています。（原文ママ）

学んだことを活用することで，習得につながる。



第３学年では，理科の学習において，オクラとホウセンカの栽培を行った。

３学年では，２種類の植物の共通点や相違点に着目し，比べながら学習を進めた。１枚目の種の観察では，色や形，大きさなどを比べて表現した。

２枚目の観察では，既習の長さや感触だけではなく，学習後には「子葉」などの用語を活用して，表現することができた。

３枚目の観察では，葉や花びらの枚数や形を比べて観察し，表現した。

前学年での観察や，算数科など他教科で学習したことを関連付けたり，つなげたりすることで表現する力が身に付いた。１学年から２学年，３学年へと上学年への学びのつながりとしてとらえることができる。

② 伝え合う場の設定

（1）相手意識や目的意識の明確化

→「誰」に「何」を伝えたいか

自分の思いや願いを表現できる場の設定が必要である。そのために，相手意識や目的意識を明確にし，「誰」に「何」を伝えたいのか，ねらいをはっきりさせておく。また，伝え合うためには，情報を発信するだけでなく，受け止めた側も「何」を「どう受け止めたか」を発信しなくてはならない。そのためには，情報を発信する側と受け取る側が，どのような場が効果的であるのかを考える必要がある。

↑自分で考えたことを伝え合う場

↑グループで気が付いたことを伝え合う場

↑受け止めたことを伝える場（保護者も含む）↑

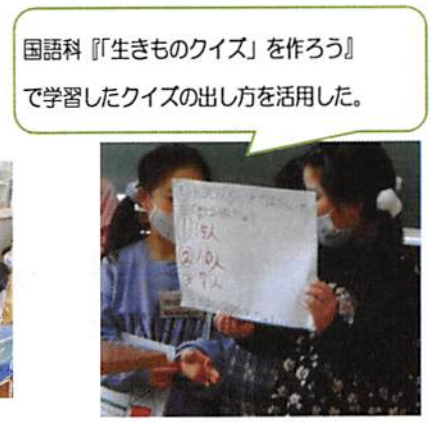
（2）言葉，絵，写真などを組み合わせた活動

→どのような方法で相手に表現するか

伝え合う場では，情報を発信する側と受信する側が，どのような方法で表現し相手に伝えることが，より効果的であるかを考える必要がある。授業の始めは，教師から教えることが多いが，児童の思いや願いが強くなってくると，「こんなふうにしてみたい」と考え，表現する意欲が高まってくる。また，練習や相手に伝えることを重ねることで，表現力が身に付いてくる。伝え合う方法を選択し，活用することで他者と伝え合ったり，振り返ったりすることができるようになる。

↑紙芝居形式で伝える。

↑ポスター形式で伝える。



↑クイズ形式で伝える。

↑ペープサート形式で伝える

自分たちの人形を作り，場面ごとに動かしていく。情報を受け取る側が，友達が見たことや質問をして分かったことを追体験することができる。

↑ロードマップ形式で伝える（ポスター形式と併用）

図書館のどこにいるのかを分かるように地図上の現在地を動かしていく。

情報を受け取った側も何が分かったのかを発表したり，ワークシートに書いたりして，伝え合うことで，その大切さを実感できるようにする。また，双方向のやり取りを通して，自分の気付きの質を高めることにつながる。

ようこそ　町たんけん　発表会へ

発表する子どもたちも　発表を聞く子どもたちも　皆　真剣に取り組んでいて大変　立派でした。クイズ形式にしたり　写真や絵を使ったり。工夫が　はえていて　とても楽しく見せていただきました。

準備や　発表中　も　協力しあって　いたところや　ハキハキと大きな声で　発表していたので　とても聞きやすく　よくわかりました。聞いている人も　いっしょうけんめい　説明をきいていて　質問も　発表について　何がわかったのかを　見ている人に　つたえていて　とても　よかったと　思います。

自分たちでは気付かないところも 家の人たちからの感想で自分たちの成長に気付くことができた。

ようこそ　町たんけん

みんなで　協力し合ってる姿が　たくさん見られて　一年生の時とくらべて　成長を　感じました。　発表も　分かりやすく、がんばっている姿に　とても　感動しました。　今日は　ありがとうございました。

ようこそ　町たんけん　発表会へ

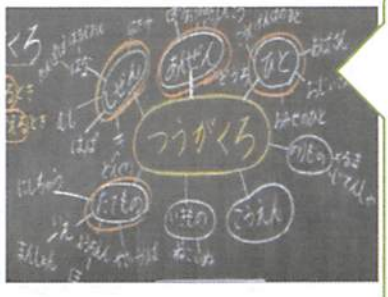
発表の内容を　クイズ形式にして　いて、とてもわかりやすかった。クイズに当たると　ようこんだり、はずれると　くやしがったり、もりあがったので、発表の内容が　心にのる　良い工夫だと　思いました。

（3）思考ツールの活用（イメージマップ，付箋，XY チャートなど）

→視覚的に提示し，思考を深めたり分かりやすく伝えたりする。

思考ツールを活用することによって，子どもたちの考えが整理され，より明確になる。思考が自分にも相手にも目に見える形となり，相手により理解してもらえることにつながる。思考が深まることで，自分の思いや願いがあふれ，表現する力につながっていく。

思考ツールとして，発達段階に応じて児童が使いやすいものを選択し，より効果的なツールを使うことが必要である。



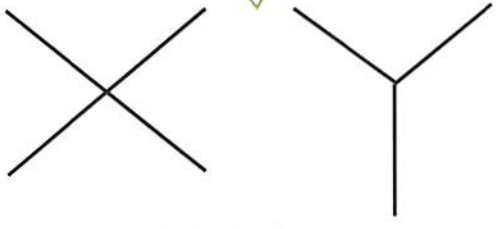
考えたことを関連付け，イメージを広げることで，つながりや新たな気付きとなる。

↑イメージマップ（関連付ける）

自分の考えを絵や図，言葉で表現しやすい。また，貼り直しが容易なため，１年生にとっても扱いやすい。

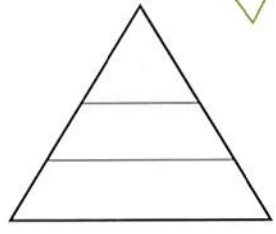
↑付箋（視覚化する）

4つ又は3つのまとまりに区分することができる。

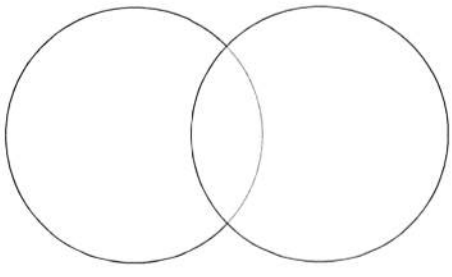


↑XY チャート（分類する）

複数の事柄の関係を構成することができる。



↑ピラミッドチャート（構造化する）



２つのものを比較することで，相違点と共通点が明確になり，　思考が深まる。

↑ベン図（比較する）

など

③ 気付きを深める工夫

（1）気付きの視点をもたせる教師の声掛け

→気付きを自覚化させたり，関連付けたりする。

・「よく～に気が付いたね」【容認】	・「～について，ほかに気が付いたことは？」【補足】
・「～ということかな」【確認】	・「～するには，どうしたらよいかな」【課題の明確化】
・「～と同じところは？」【関連付け】	・「自分ができるようになったことは？」【自覚化】
・「～と違うところは？」【相違点】	・「～さんのと比べてみよう」【比較】
・「どうして～と思うの」【疑問】	「～と考えると，～になるかな」【推測】

（2）既習事項との関連性や相違点の視点

→学習のつながりをもたせ，思考を深める。

「～と比べると」「前と違って，～だ」

江弁須方面は，加良部方面と違って，大通りがあるね。

↑学区探検【２年】

○○さんの家は，緑道を使うんだね。ぼくの家に行くには，大通りを通って信号も渡らなくちゃいけないよ。

↑グループでの伝え合い【２年】

（3）振り返り（ワークシート）

→活動を振り返るとともに，友達と気付きを共有する。

学習を振り返る際に大切なことは，自分が活動して気が付いたことを表現するだけでなく，できるようになったことを通して，自分の成長に気付くことである。そのために，活動する前の自分と，活動後の自分に焦点を当て，振り返りをさせることが必要である。さらに，全体で共有することで，友達の称賛や補足などによって，気付きの質を高めることにつながる。